

1. 悪魔の策略に対抗する

ペテロの手紙#1

<https://ichthys.com/Pet1.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

悪魔の策略に対抗する: ペテロ第一の手紙とペテロ第二の手紙と一緒に学ぶのが最適です。この二つの手紙は、サタンの攻撃下での霊的成長という共通の課題を扱っているからです。ペテロはこの二つの手紙の中で、霊的成長の必要性和手段を読者に思い出させるだけでなく、当時の信者の霊的成長を妨げていた二つの大きな危険も指摘しています。これらの危険は、神の計画から個人的、教義的に逸脱するもので、今日でも霊的成長に対する主要な脅威となっています。妨害は、信者を主から遠ざけようとするサタンの主要な戦略です。信仰が強く堅固で成熟した信者は、個人的な苦しみや間違った教義によって信仰が損なわれてしまった人よりも、背教者になる可能性は、はるかに低いです。

- ペテロは第一の手紙で、信者が霊的に成長して神の目的を果たすことを妨害する、深刻な問題や人生によくある複雑な事柄、すなわち**苦しみ**を扱っています。

- 第二の手紙では、ペテロは、信者を虜にし、真理から遠ざけてしまうもう一つの大きな脅威、すなわち、**偽りの教え**を扱っています。

ペテロは、忠実な信者はこの二つの危険に抵抗しなければならないと告げています。人生の悩みや誘惑によって神を疑ったりして、神の御計画から目をそらしてはいけません。また、どんなに魅力的に見えても、誤った教えに惑わされてはいけません。

クリスチャンは、この難しい二重の仕事をどのようにして達成すればよいのでしょうか。神の言葉を取り入れることによって(すなわち、聖書の真理の原則を聞き、信じ、それに生きることによって)、信者は霊的に成長し、信仰が強められ、人生のテストや試練に揺らぐことなく耐えられるようになり、同時に正しい教えと異端の教えを見分けることができるようになります。

歴史的背景: ペテロは紀元 62-63 年頃から紀元 66-67 年頃に殉教するまで滞在していたローマからこの二つの手紙を書きました。私たちはペテロがいつ、どうしてローマ

を立ち去ることになったかについて正確にはわかっていません。この件に関しては、多くの不正確な伝承があります。しかし、彼がローマに滞在したのは、54-68年に統治したネロの治世であったことは確かです。タキトゥスの年代記 15 巻 44 頁には、64年にネロが行った迫害について、私たちが知っているほとんどすべてのことが書かれています。ネロは、ローマ市の大部分を焼き尽くした大火を自分が命じたという容疑を晴らすために、キリスト教徒に濡れ衣を着せ、替え玉として捕らえ、常軌を逸する非人間的な拷問にかけた(動物の皮に包んだまま十字架につけ、生きたまま焼き、野犬に投げつけるなど)、と書かれています。ペテロ自身はこの迫害の後、ネロの治世の末期に殉教した可能性が高いです。キリスト教徒へのネロによる猛烈な迫害がローマのポメリウム(市域)を越えて行われたという直接的な証拠はあまりありませんが、この首都におけるキリスト教徒への攻撃は地方にも影響を与えたに違いありません。タキトゥスが我々の信仰を「墮落した、卑劣な、恥ずべきもの」と表現していることから、帝国中の信者が、**<国中に広まっている>無知と恐怖と敵意に直面していたことが分かるでしょう。**1世紀当時、キリスト教徒であることは、自分のライフスタイルと生命を危険にさらすことでした。

プリニウス(10 巻 96-97 頁)は、この時代から約 50 年後にトラヤヌス帝に宛てて、キリスト教徒への対処法について指示を求めています。プリニウスは皇帝に、キリスト教徒という「名前」を持つことが法的措置に値するかどうか尋ねました。トラヤヌスは、プリニウスに、積極的にキリスト教徒を探すべきではないが、キリスト教徒と判明した者は、棄教して皇帝に奉獻しないならば、処刑すべきであると答えています。プリニウスの書簡は、初期キリスト教徒たちの法的立場がいかに危ういものであったかを示しています。彼らは常に摘発や迫害の危険にさらされており、その背景には、嫉妬や経済的利害など、さまざまな悪意ある動機が存在していました。たとえば、異邦人が福音に応答したことによる嫉妬からの迫害(使徒 17 章 5 節)、経済的理由による迫害(ピリピでのパウロとシラスの事件、使徒 16 章 19 節、あるいは新しい信仰が女神アルテミス像の商売を脅かすと恐れられたエペソでの暴動、使徒 19 章 23-41 節)などです。

1 世紀の信者は、今日の社会と同様に墮落した社会のあらゆる圧力や誘惑に対処しなければならなかっただけでなく、迫害の危険から常に警戒していなければなりません(後で、こうしたいくつかの今日と当時の共通した側面について取り上げて学んでいきたいと思えます)。このような環境の中では、個人的な悲劇や挫折は、なおさら重くのしかかるものとなったに違いありません。**強く、前向きな信仰だけが、霊的成長の妨げになるような事態に対する忍耐を与えることができるでしょう。**

迫害:この時代におけるサタンの間接的な攻撃、すなわち信者の信仰への圧迫についても、ここで触れておくべきでしょう。迫害や個人的な苦しみは、成長し生き生きとした信仰に対する直接的な試練です。信者は「気を失う」ように弱り果て、神が試練から救い出してくださる力を疑う誘惑にさらされます。しかし、異端的な教えはそれ以上に陰湿で欺瞞的な脅威です。信仰の土台を覆し、その支えを内側から腐らせてしまうからです。後に詳しく考察しますが(これは本来、第二ペテロの主題です)、1世紀に広まった誤った教えと、それに対応する現代の偽りの教えについて取り上げることとなります。ただし最初に押さえておきたいのは、初代の信者たちが、私たちが当然のように持っている多くの恵まれた条件を欠いていたという事実です。とりわけ、まだ完全な聖書は存在していませんでした。各地の教会の指導者たちも、信者になって間もない者ばかりで、正式な神学教育もなく、神学校もなく、キリスト教に関する書籍もなく、使徒たちですら最も重要な教会に時折訪れるのがやっとという状況でした。それでも、信仰の仲間である彼らは信仰を守り通しました。この二つの手紙においてペテロは、当時のクリスチャンたちに対し、信仰への二重の脅威(苦難による惑わしと、虚偽の教え)を警告し、信仰を守り確立する正しい方法を思い起こさせ、さらに霊的に成熟しきるようにと挑戦を与えました。それは、彼らの人生が祝福され、永遠において豊かな報いを受けるためだったのです。

まとめ:

執筆時: 西暦 62-67 年

書簡の当てられた読者: 小アジアの全信者(回状として)

場所と著者: 使徒ペテロがローマから書いた。

ペテロ第一の手紙のテーマ: 人生の問題(苦しみ)に自分の霊的成長を妨げさせてはいけない。

ペテロ第二の手紙のテーマ: 間違った教えに自分の霊的成長を妨げさせないように

霊的成長: 神は、私たちが神の真理を学ぶために必要なすべてを備えてくださっています(聖書、自由意志、生活に必要なもの、そして御言葉を聞き、教えられ、解き明かされる機会)。私たちが御言葉を聞き、それを受け入れ(理解し、信じ、行動に移す)ならば、私たちは「築き上げられ」、霊的に成長していきます。そして少しずつ信仰の広さと深さを増し加え、人生の厳しい試練にあっても、主イエス・キリストへの熱心で揺るがぬ愛を保つことができるようになります。さらに、神が私たち一人ひとりに委ねられる働きを成し遂げるのに十分な力も備えられていくのです。

そして、わたしたちの主また救主イエス・キリストの恵みと知識とにおいて、ますます豊かになりなさい…(第二ペテロ3章18節)

